

芸劇dance

ローザス「ドラミング」



Drumming 1998 © Herman Sorgeloos

芸劇にローザスがやってくる!

からだ動くことに、音楽と身体がひとつの空間をつくりあげることに関心があるなら、このステージをのがすべきではない。

芸劇でローザスをやるの? それも『ドラミング』を?

この公演のことを聞いたとき、意外におもっているのを、もうひとりのわたしが気づいた。おかしいことなんかないよ。だって公共のホールだし、自主事業もあるし。でも、でもだ。この劇場で、フェスティバルとかではなく、海外のダンスの公演の記憶があるかい?と、脳内で対話がつづく。そうだ、たしかに演劇はさかんにおこなわれている。ダンスとはといえば、あまり記憶にない。だったら、ローザスの公演はひとつの転機になるのだろうか?!

高音の革張りの太鼓の音が、あいだをあけながら、一定のテンポで打たれてゆく。打たれた音はアタックとともに減衰する。が、もう残響も消えたとおもった瞬間、つぎの音が打たれる。何回かの後、ひとつのパターンに慣れた耳に、これまでなかった音が不意打ちする。そ

れが新しいリズムとなる。またしばらくいくと、さらに……。

次第にうねりをつくりだし、聴き手を巻きこんでゆくリズムと音色。それとともに動く身体。ひとり、ふたり、そして最終的には12人が音楽とともに、音楽とずれながら、音楽とはべつのうねりを生みだす。

シンプルな音でできているのに、そのシンプルな音が組みあわせられると思いがけない複雑なひびきになる。スティーヴ・ライヒの代表作〈ドラミング〉を、ベルギーのダンス・カンパニー「ローザス」が踊ったのは1998年。主宰のアンヌ=テレサ・ドゥ・ケースマイケルにとってライヒ作品は自らのダンスをつくってゆくうえでの構成面でも感性面でも根幹にかかわってくるものではあったけれども、これほど大きな規模のものにはなかった。

2001年、ローザスはこの列島の3つの劇場で『ドラミング』を公演したが、すでにいま14

年経過し、メンバーも大きく変わった。ライヒの音楽があり、それに応じたかたちで各ダンサーたちの身体的特徴や振付を考慮してつくられた、それでいて十分にファッショナブルな衣裳が走り、とまり、歩き、一緒になったり分かれたりしながら、さまざまなダイナミックにうごく。ダンスと音楽がときにずれつつも一体化した時間と空間をつくる。前回の来日から5年経っているのに、このステージは若い世代にこそ、とおもうのは、以前にふれた世代の願いでもある。

今回特に注目しておきたいことのひとつは、アンヌ=テレサとともにローザスをたちあげたダンサー、池田扶美代がワークショップをおこなうことだ。通常のWSなら特にクローズアップする必要はない。だが今回のものは、『ドラミング』に即したものであるという。つまり作品のなかで用いられているさまざまなうごき、手も腕、あるいは足・脚、さらにステージでの直線や曲線、さまざまなヴォキャブラリーを「やってみる」という。これはおもしろい! 自分がちょっとやってみようが、観ているステージ上にでてる。あ、ここに、またここにも、というふうに、気づくことができる。やってみたときにちょっと痛かったり、快感だったりしたことも思いだすかもしれない。そこからダンスを観ることも、ただ観ているというとは変わって来るのではないか。

公演をおこなうことと、観ることにつなげたかたちでWSがおこなわれるというのは、公共ホールの理想のありようではないだろうか。そんなひとつの試みがローザス『ドラミング』でおこなわれることに、あらためてわたしは感嘆してしまうのだが。

文:小沼純一(早稲田大学教授/音楽・文芸批評)

◆関連企画  
池田扶美代氏による〈ドラミング ワークショップ〉  
4月10日(金)~12日(日)開催 ※申込は終了しました。

4月16日(木)~18日(土) プレイハウス

振付:アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル  
音楽:スティーヴ・ライヒ〈ドラミング〉  
衣装デザイン:ドリス・ヴァン・ノッテン  
出演:ローザス・ダンスサーズ

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
後援:ベルギー王国大使館

詳細はP9へ

TACT / FESTIVAL 2015 5.3 [日・祝] — 6 [水・休]

海外から、こどもも大人も楽しめるパフォーマンスを招いて開催。  
今回はフランス、カナダから注目作品をお届けします。



©Vincent Beuisme

クレール・リュファン 「眠れない… -L'insomnante」  
Claire Ruffin: L'insomnante

悪夢より、一歩手前の夜をご一緒に

眠れない夜。何度も寝返りを打ち、枕を換え、寝る方向を違えてみても眠れない。しかもいま、闇の中で何かが動いたような気がする……といった経験は誰にもあるはず。しかしそんな夜を題材に、50分近いパフォーマンス作品を作ってしまったのがクレール・リュファンである。眠れぬ女性のそばには不安な音色を奏でるチェロ弾きがあり、天井にはなぜかびっしりと大量の枕が。しかもそこには「誰か」がいて、彼女の眠りを助けてくれようとあれこれやってくれるのだ。

昨年、舞台上の全てを崩し去る作品『リメディア』で度肝を抜いたカミーユ・ボワテルが美術&出演で参加する。寝室という制限された空間ならばこそ、逆に意表を突く装置のアイデア、具現化される妄想の数々が、あなたの心をワシづかみにするはずだ。



©Gary Mulcahey

劇団コープス「ひつじ」  
Corpus: Les moutons

現実とファンタジーが会う、ユニークなライブパフォーマンス。カナダの劇団コープスが、今年も面白くて不思議な田舎のひつじ牧場を再現。



©Patrick Berger

パリ・国立シャイヨー劇場 ジョゼ・モンタルヴォ 「アサニシマサ〜魔法の呪文」  
José Montalvo: Asa Nisi Masa

呪文が開ける、マジカルワールドの扉

不思議な呪文がタイトルの本作。振付のジョゼ・モンタルヴォによれば、これは「こどもと、大人のなかの“こども心”が一緒になって歌ったり踊ったりできる作品」だという。モンタルヴォは一昨年来日した『トロカデロのドン・キホーテ』でも現実と見まごうような高精度の映像とダンスを駆使してみせたが、今回その「魔法」はさらにパワーアップしている。

アフリカ風のリズムに合わせて呪文が繰り返されると、動物たちが大きなスクリーンいっぱい走り回る。ときに通常ではあり得ないような驚きのダンスを、舞台上のダンサー達と一緒に踊り出したりする。モンタルヴォの言葉通り、そこに大人もこどもも関係ない。想像力という「魔法の呪文」で、見たことのない世界への扉が開かれるのだ。

文:栗越たかお(作家・ヤサぐれ舞踊評論家)

	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00
3日[日・祝]					アサニシマサ	ひつじ	眠れない…
4日[月・祝]	眠れない…	ひつじ	アサニシマサ				
5日[火・祝]	アサニシマサ	ひつじ	眠れない…				
6日[水・休]	眠れない…	ひつじ	アサニシマサ				

ランソムナント	ジヨモン	ジヨモン
「眠れない… -L'insomnante」 シアターイースト	「アサニシマサ ~魔法の呪文」 シアターウエスト	劇団コープス「ひつじ」 ロワー広場(地下1F)
作・演出:クレール・リュファン 出演:カミーユ・ボワテル [ほか]	振付:ジョゼ・モンタルヴォ 出演:パリ・国立シャイヨー劇場ダンサー	【観劇無料】
主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) 東京都/アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団) 後援:豊島区	「眠れない… -L'insomnante」 助成:アンステイチュ・フランス/パリ本部 後援:在日フランス大使館/アンステイチュ・フランス日本	「アサニシマサ ~魔法の呪文」 後援:在日フランス大使館/ アンステイチュ・フランス日本

※アトリエイースト・アトリエウエストにて関連イベントあり

詳細はP11へ